

---

# 販売員ではありません。

悠梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

販売員ではありません。

### 【Nコード】

N7331L

### 【作者名】

悠梨

### 【あらすじ】

両親不在でタイクツしていた少年、ルディアス・マクガルディ。つい飼い猫とうとうとしていると……。

一方、新米の魔王ケイオスは、今日も部下のフライスに叱られていた。

## その1

その日も、ルディアス・マクガルデは タイクツしていたのだった。父は例によって騎士団長に助力を請われて出かけていたし、母は：今はどこにいるのかすら分らないし、そう滅多には帰ってこない（その代わり、帰ってきてくれたらいつも珍しいお土産を（物も話も）たくさん持ち帰ってくれるし、しばらくは嫌というほど遊んでくれる）。

お手伝いのクリスおばさんは、いつものように家事の出来ない両親に代わって洗濯や掃除・夕食の調理などにてんでこまいだし、書庫にあった子供向けの本はほとんど読破してしまっていて、目新しいものは何も無かった。

いつもなら相手にしてくれる家庭教師のケッヘルさんは、今日に限って仕事が終わるや否や、そそくさと帰ってしまった。彼女とデートラしい。これだから大人ってやつは。

仕方なく庭に置いてある籐籠で、手足を畳んで箱型になって日向ぼっこしていた猫のチビ（今でこそデカイが、拾った当初は手のひらサイズだったらしい）を撫で回していたら、ウザそうに顔をしかめられた。尻尾が不機嫌そうにバサバサと振られている。

猫という生き物は、そこにいるだけで眠気を振り撒いている……とは父親の弁。

確かにそうかも知れない。チビの真っ白で柔らかい毛並みを行きつ戻りつ、もふもふと堪能していると欠伸が漏れてしまった。

当のチビは表情こそウザそうだが、今はもう尻尾も振っていない。多分撫でられているうちに、自分も眠くなってきたのだろう。ゴロンと身体を横たえると、目を閉じてしまった。

「坊ちゃん、おやつの時間ですよー」

いつの間にやらウトウトしてしまっていたらしい。クリスおばさんの声に目を開くと、チビは彼の腕を枕にしてスヤスヤと寝息を立てていた。

何だろう、何かひどく楽しい夢を見ていた気がするのだが、思い出せない。

「また、会えるかな？」

無意識に呟いて寝ぼけた眼をこすりこすり、猫を起こさないようにそおつと腕を引き抜いて彼は立ち上がった。ブーツとパンツにたくさんついた草と猫毛を払い落としつつ、元気な返事をおばさんに返す。

おばさんの作ってくれるお菓子は絶品なのだ。今日は多分、ミルクをたっぷり入れた紅茶と採れ立てリンゴで作ってくれたアップルパイだろう。生クリームがたっぷり添えてあれば嬉しい

「……で、まんまと返してしまっただけですか」

頭痛をこらえるかのように片手をコメカミにやりながら、彼が言う…… そらまた始まった、お説教だ。そう思いつつ、ケイオスはささと両手で自分の耳をふさいだ。いつものことなので、この次に何が来るのかも分かる。

「アンター一体何考えてるんですかつ！ こ、こ、こんなチャンスを無駄にするなんて！！」

あたり一体がその怒声にビリビリと震えた。古ぼけた根城の壁も天井も相当脆くなっているの、いつ崩壊してもおかしくはないはずだったが、そこはそれ、自分が結界を張って防いでいるので大丈夫だろう。

「怒鳴らないでよ、フライス。ボクだって、これでも頑張ったんだよ？」

でもあまりにもあの子、ルディって言っただけ？ 純粹無垢でね。

ついついほだされちゃった。てへへ。

頭を掻きながら言ってみると、フライスが床に手をついている。ぶつぶつと唱えているのは、多分呪文。

どこか他人事のような気持ちで思う。あ、こりゃヤバイわ。

ふと、フライスが顔を上げた。床にはボンヤリと魔方陣が光る。彼が息を吸う。予想通り怒声が放たれる。

「アンタってヒトは~~~~~!!!!」

閃光が瞬いて爆音が

……しなかった。

フライスの描いた魔法陣に重なるようにして、もう一つの魔法陣が光っていた。自分が彼の魔法をキャンセルするために、瞬時に描いたものだ。この程度の魔法なら、呪文の詠唱すら必要は無い。

しかしそのくらいのことはフライスも予想していたのだろう。怒りの表情はそのままに、まくしたててくる。

「バカ、ホントに太バカ！ お父上の 先代魔王サマの、憎き仇の息子ですよ！？ なんで捕らえて殺さないんですかつ」

「んゝそんなこと言われてもなあ。ボク、父上の666番目の子供だよ？ ほとんど父に会ったことも無いしなあ」

ていうかさ、何でボクが次の魔王継がなきゃいけないの？

何度目かの同じ問いを口にする、フライスが奇声を発しながら髪をかきむしっている。

いつもそんなにカリカリして、カルシウムが足りてないんじゃないのかと思う。

「あーもうホントやってらんねえーーーーなんでこんなバカ息子が一番魔力持ってたんだよーーーーなんでオレこんなバカ息子の教育係しなきゃなんねーんだよあーーーー」

……そんなこといわれても。

だがつまるところ、この魔力さえ無ければ自分は「魔王」なんて面

倒な立場になくて済むのだが。

「大体さあフライス、冷静に考えてごらんよ。明らかに父上の方が悪いじゃん。破っちゃならない「均衡」と「法則」を犯したのは、父上でしょ？ ぶっちゃけ消し炭にされても自業自得じゃん」

## その2

とりあえず人間の書物に書かれている魔物像を演じてみようと思った。

ぶっちゃけていえば、それは退屈しのぎだった。

フライスの目を盗んで、こっそりと根城を抜け出した。ヤツときたら、口を開けばやれ「父上の遺志を継げ」だの「魔族勢力の再興を！」だの「魔王としての自覚を持て」だのと、口やかましいたらありやしない。

大体「魔王としての自覚」って何なのだろう。自分はきちんと「三者により定められた法則」に則り、「結界と世界樹の監視と管理」をして「均衡の維持」に努めている。それ以上、何をしろというのだろうか？

一度考え出すと、妙にそのことが気になった。

お気に入りの世界樹の幹によりかかって、悶々と考えているが答えは出ない。

そもそも自分と同じように怠惰な性格だった父が、なんで人間なんぞに戦争を吹っつけたのかも分からないし、魔族という存在が人間にどう思われているのかということも分からない。

魔族と人間、異種族間にあるものは？

外の世界に興味を持ったのは、それが初めてのことだった。

とりあえず一旦居城に帰ったケイオスは、父親が遺した書籍を漁ってみることにした。

書斎の扉は重く錆びついて、室内のカビ臭さが何故か心地よい。蔵書は思ったより多くて、沢山の本棚に分厚い書籍がぎっしりと詰まっている。何でも、父がここを根城に定める前に住んでいた人間が置いていったものだという。

その中の一冊を何となく手にとって開いて

「で、そういうカツコウで僕のところに来たの？」

「うん。ついでに言えば、これからキミを連れ去ろうと思ってます」正直なところ、少し凹んでいた。目の前の少年のリアクションは自分の期待とは全く異なっていたので。

何となく一番近くの街にやってきたケイオスは、これまた何となく街の入り口から近いところにある屋敷にコッソリと忍び込んだのだった。

先ほど読んだ書籍で予習はバッチリである。あの本によれば、人間の想像している「魔王」とは長い白髪の老人で、小さな子供をさらってゆくのだという。

とりあえずそれをすれば、フライスにも「魔王としての自覚がある」と認めてもらえるのだろう。そう思った彼は、自身の姿を白髪の老人に変え、屋敷の庭で猫と一緒にウトウトしている子供をさらって帰ろうとして近づいた。

子供はすやすやと気持ち良さそうな寝息を立てていたが、自分が近づいたのを気配で察したのだろう。

ゆっくりと猫の毛に埋めていた頭を上げて、少年は焦点の合わない目で自分を眺め、そしてひとこと。

「……『子供用の教材なら間に合ってます』ってお父さんが」



### その3

「……」

何と返したら良いものか。 ケイオスは迷った。 が、とりあえず。

「お母さんじゃなくて、お父さんがそう言ったの？」

「突っ込むとこ、そこ!？」

ガバッと顔を上げて即座に突っ込みを入れると、子供は何がおかしいのか大爆笑している。

そういえば、こんなに笑っているヒトを見るのは生まれて初めてだ。

1、2回しか会ったことは無いが、記憶に残っている父親は常に不敵で悪く感じの笑顔しか見せなかったし、木霊である母はそもそも姿を見ることが自体稀だった。

……それにしても、何でこんなに笑ってるのかも分からないが、見てて悪い気はしないのが不思議だ。

ケラケラと可愛らしい高い声を上げてひとしきり笑うと、子供は目の端に浮かんだ涙を拭って言うてくる。

「おじいちゃん、教材の販売員じゃないの？」

「よく分からんが、違う」

「じゃ、誰？」

ふふふ、このときを待っていたのだ。 ケイオスは内心ほくそ笑むと、「坊や、我と共に来るが良い。我が名は『魔王』。そなたは選ばれたのだ、素晴らしき場所へと招待しようぞ！」

はさり。被っていたフードのついた外套を払い、高らかと言い放った。

ひゆるり。庭に冷たい風が吹き抜けた　　ような、気がする。  
なぜだかケイオスは、そこらに穴があったら入りたいような気分に見舞われた。

「　の『魔王』の一節だね、それ」

冷たい空気を払拭するかのように、子供が苦笑いで言う。

「おじいちゃん、本当のところは何しに来たの？」

「……いや、だからそなたを選ばれた場所へ」

「それもう聴いた。で？」

「……えーと……」

「……？」

「……」

無いのなら　掘ってしまおう　墓の穴（五・七・五）。  
生憎、スコップは持ち合わせていないが。

「で、そういうカッコウで僕のところに来たの？」

「うん。ついでに言えば、これからキミを連れ去ろうと思ってます」

事情を話せば、子供はひとまず納得したようだった。ふうん、と他人事のように相槌を打ちつつ、「でもさ」と言葉を継いだ。

「僕をどこに連れ去るつもり？」

「僕の住んでる城へ」

「連れ去って、どうするの？」

「それは……えーと」

そつえば、そこまで考えていなかった。むむむ、と頭を抱えなが

ら考え込んでしまう。

その様子を少し冷めた目で見ていた子供　　ルディアスとかいったか　　が、猫の背を撫でながら言う。

「おじいさんさ、『魔王』って言ったよね？」

「うん。あ、でも僕まだ『おじいさん』って言われるほどの歳じゃないんだけど。この姿も、本当の姿じゃないし」

「いくつ？」

「忘れた。でも魔族的にはまだ『おじいさん』じゃないんだよ」  
「ていうかさ、本当の姿に戻ってもいい？」

いつもと違う姿で長いこといるので、何となく居心地が悪くてもぞもぞしてしまう。

「だめ。『魔王』ってことは、人間じゃないんでしょ？　ここで元の姿に戻ったら、人間に殺されちゃうよ！」

それもそうである。この子供、実年齢以上に聡明だ。

「おじいさんじゃないなら、何て呼んだらいいの？　『魔王』さん？」

「一応僕、ケイオスっていう名前があるんだ。そっちで呼んでよ」

「分かった。じゃあケイオス、あのね」

ルディアスが、猫を撫でる手を止めて顔を上げた。こちらの様子を伺うかのように、顔を覗き込んで来て、そして。

「僕のパパとママは、ケイオスのお父さんを殺したヒトなんだけど。それ、知ってて来たんじゃないの？」

## その4

父が人間に倒されたと知ったとき、何も感じなかったわけでは無い。

面識が殆ど無いし、愛情なんて注いでもらった記憶も無い。血の繋がりがしかなかったけれども、それでも彼は『偉大なる魔族の王』だった。

自分たちを統べるもの・先導するものを失った、その衝撃は最初こそ大きかった。だがよくよく考えてみれば、666人も子供がいるのだから、すぐに誰か後を継ぐのだろう。

それが自分でないことだけは確かだ　　と思つて、樂觀していたのだが。

父が死んで即座に、後継者争いは始まった。血の気多き上の兄妹たちは、血で血を洗うすさまじいまでの戦いを繰り広げたと聴く。

面倒なのと興味が無いのとで、全くいつもと変わらぬ生活を送っていた自分がその闘争に巻き込まれたのは、ちよつとした偶然だった。ただ飛んできた火の粉を振り払ったに過ぎなかったのだが、その際に強大な魔力が兄妹やその他の父の側近だったモノたちの目に留まつてしまった。

そうして、ちよつと息の長く苛烈な兄弟喧嘩の中で、気がつけば兄妹たちを圧倒的な力の差でねじ伏せ、やれ『次世代魔王』だ何だと担ぎ上げられてしまっていた。

……ケイオスにとっては、何とも傍迷惑な話である。

まあ、そういった意味では人間に全く恨みが無いではなかった。それまでの平穏な生活が、面倒ごとと制約だらけの魔族の信仰対象者になってしまったのは、彼らのせいであると言えなくも無い。

さりとて仇討ちをしたいかという、それもひどくメンドクサカツ

タ。第一父の側近から事情を聞けば、悪いのは一方的に父なのだから。

「そんなこんなで、僕はルディに対して個人的な恨みがあるわけじゃないし。別に仇を取りたいとも思わないよ」

でもキミのご両親に対しては、僕の立場上、一度挨拶くらいはしておかないといけないかもね。

『魔王』ってのも色々大変なんだよ？

苦笑いしながら、かいつまんで説明する。

ルディはホツとした様子だった。割と普通に見せてはいたようだが、やはり偶然とは言え『魔王』と対面するということに対して、相当気を張っていたらしい。

（まあまだ9歳の子供だもんなあ。自分を殺しに来たかも知れない相手となんて、普通はこんなに冷静に会話できないよ）

内心感心してしまう。

「ケイオスってちょっと変わった魔族なんだね。何か魔族っぽく無い感じ」

「あゝそれ、口うるさい側近によく言われるよ」

肩をすくめて見せると、最初のときのようにルディアスはケラケラと笑った。

ふと気がつけば、もう日が傾きつつある。そろそろ根城に戻らないと、口うるさい側近　フライスがまた癪癪を起こしかねない。

「さてと、それじゃ僕は帰るよ。魔族のための仕事もきちんとしないと、側近に雷落とされちゃうからね」

「僕をさらわなくてもいいの？」

「うん、そんなことしても意味無いし」

急にルディアスが黙り込んだ。少しの間ためらった後、こちらを上

目で見上げながら一言。

「ねえ、また来てくれる？」

「気が向いたらね」

というか、キミのご両親への挨拶参りが済んでも僕が生きていられたらね。

何せ父を倒したこわい『勇者』様と『魔女』様なので、挨拶ひとつするの命がけだよ。

……というのは心の中だけで答えておくことにする。

それにしても、初めて接触した人間が「父の仇の息子」だったとは偶然とは恐ろしいものである。

このことがこの先どういう意味合いを持つてくるのかは分からないが、とりあえずその日の出来事が「人間という生き物は興味深くそれなりに愛らしい生き物である」という第一印象をケイオスに残したのは確かであった。

これが覆されてしまうのは、そう遠くは無い未来のお話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7331/>

---

販売員ではありません。

2010年10月11日04時52分発行